

英語のリズムとアクセント

近 藤 正 栄

言葉が音声から成り立つのであれば、そこにリズムとアクセントの問題が必然的にかかわってくるのは当然である。しかもこの二つは切り離せない相関性をもっている。リズムで心地よいものは、基本的に強弱弱型か弱弱強型の韻律（律動）である。また、両者の組み合わせの変化も可能である。これと密接に結びついているのがアクセントである。

言葉のリズムはその国の言語を性格づける、いわば命である。日本語の語句のリズムは強弱弱型で、私はこれをソーラン節型として特色づける。英語は弱弱強型の逆ソーラン節型として説明している。日本人にとってソーラン節を逆ソーラン節でうたうと極めて妙な感覚になる。われわれは弱弱強型のリズムには馴れていないからである。

リズムと切り離せないのがアクセントである。人間でいえば、性格と個性との関係である。アクセントは二種類に分けられる。一つは音の強弱を基本とする force (stress) accent で、もう一つは音の高低を表す pitch accent である。この両アクセントは表裏一体のものだが、国の言葉に特色があるのではこのピッチ・アクセントの特色に関係がある。フランス語と英語ではその相違は歴然としているし、日本語には日本語特有なやり方がある。日本人は日本語と英語のピッチ・アクセントがどう違うのかをまず知るべきである。

今年、全米野球のヒーローとなったイチロー選

手の名前のアクセントが問題となった。イチロー (Ichiro) の「イ」に力点を置いた強弱弱型のリズムにはしたものの、「強」のところにかかる英語式のピッチ・アクセントでは、あまりにも日本式の名前の呼び方とはかけ離れてしまい、失礼にあたるとして、異例の措置としてマスコミが日本語のピッチ・アクセントに近づける呼び方に変えることにした。アクセント表記は EEE・CHI・ROH である。つまり、英語のピッチ・アクセントでは、イチローの「イ」は「E」を上（縦）に3つ積み上げる形で素早く上げて下げるピッチになるのだが、縦ではなく横に EEE と並べれば、日本語のピッチ・アクセントになるといううまい表記法である。

問題は日本人が英会話なりテキストを読む場合に日本語の語句のリズムとピッチ・アクセントでやる、いわゆるジャパニーズアクセントである。これではせっかくの英語も死語同然であろう。逆ソーラン節に英語のピッチ・アクセントをかけるのが英語なのだ。私は40年以上前にアメリカに留学した時にこのことを悟り、さまざまな実験を試み、日本人の英語ベタの欠陥を研究し、その成果は教室で生かしてきたが、悩みは日本の英語教育が全般にわたって生きた英語教育になっていないことである。英語のリズムやアクセントの感覚的教育は本格的な知性の教育に入る前に中学生時代の初期英語教育にこそ欠かせないものなのだ。